

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	残月 : 文苑
Author(s)	蜉蝣生
Citation	龍南會雜誌, 130: 49-53
Issue date	1909-03-31
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5720
Right	

めて、大きな宿屋の傘を差して、テク／＼と歩いて行つた。

松山は暫く其處に立留つた儘、伯父の後姿を見送つて居たが、何だか自分も此の伯父と血を分つて居るやうな氣がして、急に寂しく感じた。

一しきり風が吹いた。

伯父はとある街の角を曲つた。

残 月

蜉 蝣 生

『駒を早めよ』と幻が叫ぶ。

鞭でども鞭でども、物に怖ぢた白駒は、前足を上げて嘶くばかり、そよこの身動きもせぬ。眼をさへぎる幻はと見れば、幾重の綾を透いて閃めく玉の様に、かぐはしき匂ひが夢の中なる渠を包むかと思はれる。逃ぐるのではない。確かに招くのらしい。けれども渠の駒は進まぬ。早狂はんばかりになつた。眼をいからし聲を勵まして、鞭も折れよと駒を打つ。額からは汗が泌み出で、頬を傳ひ腮を流れ、手綱を握つた拳には一身の力を集めて居る。さて猶駒は動かぬ。

渠はこう昨夕の夢を心の中で繰り返へして見たのである。

丁度四邊は此の様な荒涼たる砂山の頂で、冬の夜らしい、風のふく、星屑さへも見ねぬ恐らしい

暗を、渠を招きつゝ走つてゆく幻のかげを認めて幾萬里とも知れぬ前途を追ふたのであつた。謎の
様を默示の様な夢の跡を慕うて、想像の翼は又それからそれへと果しなく駆ける。

こゝは大川の海に入る口で、兩岸の蘆の芽を渡る風が、どこからともなく花の香を誘うて、暖い
朧の月へ吹いてゆく。向ひ側の突き出た築石の上に、時々ぼつと火の見ゆるは、捨し篝を風の煽つ
のであらう。波が碎けてかへる北へ、折柄を雁が鳴いてすぐる。夜は更けたらしい。

海の春は晝のやうに静かだ。

すると、どこからともなく琴の音が起る。霞み渡つた空氣を通して、美しい歌聲が鼓膜を動かす。
渠は、電氣に感じた様に、竦然と立つて、聲する方に耳を傾けた。天堂の調べを人に知らせじと、
更けての後を神女のすさぶとではない。元より夢でもない、幻でもない。人界の悶ねをやる慰めか、
世を捨て人の風流か、斗爲巾の絃を走る爪音の、高きはせゝらぎ、低きは波の聲。一弾は一歌をな
して明かに彼の耳にひゞく。曲は『殘月』である。

『磯べの松にはがくれて、沖の方へと入る月の——』

光りを慕ふ歌の、思ひ出を胸に刻んで渠はそのまゝに聞き入つた。身動きもせぬ。雨の頬を傳う涙
は長う垂れて、杖は砂に深う喰い入つて居る。

二

『駒を早めよ』

と再び心の中にくりかへして、はたと何物か思ひ當つたやうである。すると、

『生命は遠し、戀は更に長し』

と、心の底で或るものが答へる様に思ふ。けれども謎は未だ謎である。人の子の短き才は、偉大なる天の啓示を解くべくあまりに小さい。

渠は思ふ。

柳しづるゝ橋の畔を、春雨傘の黒きを傾けて、日毎に辿つたのは夢であつた。ゆきすりに交す笑の重つて、堪へ難き思ひとなつた時、散る花を果敢ないと思はなかつたか。夕虹を消ゆやすいと悲しんだではないか。或人は將來を樂めと云ふ。けれども、それは無理だ。人に情慾なるものゝ存する限り、現在を蔑視して、未來にのみ依頼する事は不可能である。

『駒を早めよ』

とは、此の意味であるかも知れぬ。あゝ仰げば月俯すれば水。覆載の間の美くしき限りは今眼の飽くがまゝに横はりて居る。けれどもそれが何の權威である。寧ろ人爲の琴が渠の胸に鋭くびく。曾て月明の夜、尾花が末の野を逍遙ふて、人と共に聞いたのは、同じく『殘月』であつた。變らぬものは雷に月と調とのみではない。我れ等が様も元のまゝだ。かくて再び夢を繰りかへして見る。が未だ謎はとけぬ。

琴の調べは間斷なく進む。

『光りや夢の世を早う、さめて真如のあきらけき——』

と靜かな歌のひまを磯寺の鐘が鳴る。高う低う波のうねりと相應じて、こんな韻に花が散るのなら

う。蘆の中の舟に灯がともつた。夜もやがて明くるのである。

三

月は早大分傾いた。

眼路の限りをけぶる波は、漾々として一灣の松が根を洗ひ、四圍の山々は空明に峙ちて夜の帷師の中に笑む。渠は三度

『駒を早めよ』

をくりかへした。

幻はもごかしげに渠れを見返つて。美しい笑の中へ渠を吸ひ込むかと思ひて醒めた時、恰も湖の夕を芙蓉截るごとく、萩の雨に立ちぬれたかの如く、思ひの底には軟かいながらも、肌障りのわるい、冷たい汗が全身しどろになつてゐたのであつた。

猶幻の姿を記憶の中からよび起して見る。

それは冬の女神のやうに、白い裳を長う曳いて、右手に高く盟の巻を捧げ、左手でやさしう渠を招くその度毎に、衣ずきはあつたであらうが夢なれば音もせず、静かに小羊の背にもたれて、ちつと睫は動いて居なかつた様に思ふ。

謎は遂にとけぬ。

曲は夜と共に終りに近づいて、静かに静かに爪音が走る、寂しみの中にこもる悟りの力。渠の心に深き印象をさゝめて

『月の都にすむやら』

と、再びきこなくなつてしまつた。

渠は湧き出づる涙を掌に拭うて、更に新らしくありし夜を泣いた。

残月のかげば山の端に霞みて、蘆が風なきに颯と動く。途端に、長閑かき船唄を乗せた舳がつと目に入る。そは朝戸出の漁師であつた。

其の夜の日記に、渠は數頁を費したが、最後の一句はこうであつた。

『成らぬ日ぞ、成らぬ日ぞ、我れ等が凱歌を又の世に謳はんは』
けれども、誰れも其の意味を知るものはない。

誓之泉

(一)

白 木 蓮

天地の春は幾度か廻りて、野は又美しき霞に包まれた。

麗な春の日は、麗な光を草に落して、醒めて夢みる多くの人の魂を夢から夢へと誘ふ。土に燃わ
て草に立つ陽炎の、幻に似し絲の彩は、野をゆく人の胸にもつれて優しき心の底に、微かな痛みを印
す。

彼は友を促して、草に座した。